

自分から向かう学習

長谷 誠基

新型コロナウイルスの影響で学校の休校期間が延長になり、すでに3カ月目に入ろうとしています。学齢期のお子様を持つ保護者の方は、お子様の学習が今後どうなるのか非常にご心配されていることと思います。

家で長い時間一緒にいると、お子様の様子をじっくり見ることになるので、中には勉強が始まって10分もすると休憩したり、台所に飲み物を取りに来たり…なかなか集中しないことにいらだったりすることもあるのではないのでしょうか。ここぞとばかりにこの時期の勉強の大切さや、大人になってからも勉強が大事だということ、だからこそ今が重要なんだと言い聞かせてみても、その時は『うんわかった。』と言いながら、次の日はまた同じことの繰り返し…。やる気がないのか？と疑って聞いてみると、やる気はあるという。こんなシーンが数多くあるのではないかと思います。

考えてみると大人になってからの勉強は、多くは必要性にかられてするもので、目的意識も大きく自制心も備わってきているので、頑張っ続けることができます。特に大学受験の学習などはその典型です。自分の大きな目標に向かって努力する。この体験が大人に強く意識されています。しかし、小学生や中学生のはじめの頃は特に目的意識もまだ自分を律するほど強くなく、どうしても自分に甘くなる傾向にあります。だからどうして子どもたちは自分のようにできないのだろうか？と思い、いらだってしまうのです。そこで子どもを学習に引き付けるために必要になってくるものが2つあります。1つは自分の力で問題が解けたという達成感です。何の教科でもいいので最後は自分で解けるようにしてあげるのが必要です。塾のイベント学習にあるテーブルマッチというものは、最後は自分の力で正解を出さないと前に進めないのがその典型的な学習といえます。そして1つ解けたことをほめられると、次への意欲につながっていきます(次の問題で解けないとついでなしでしてしまいますが、それはタブーです)。自分で問題を解決できたときに得られる喜びは大人も子供も同じなのだと思います。2つ目はそこに導ける指導者の存在です。保護者の方でも優秀な指導者はたくさんいますが、あまりに近い存在であるためについ余計なひと言を言ってしまったりしてうまくいかないケースも多くあります。だから塾という存在が必要なものとして残っているのでしょう。茗溪塾の授業は決して一方通行の授業ではなく、生徒との対話を重要にしながらか進めていく形を取っています。問題も個別に〇つけをしたりヒントを出したりしながら進むので、最終的には自分で答えにたどりつく場合がほとんどです。だから楽しく通ってくれている生徒が多いのだと思っています。5月から一部通常授業を再開していきます。生徒達が自分から学習に取り組めるような工夫を今後たくさん取り入れながら、本当の意味でのアクティブラーニングの確立を目指していきたいと思っています。